

○研究の成果と課題（◎：成果 △：課題）

（1）幼稚園と小学校の合同研究組織による研修会等の実施について

◎合同研究組織で研究を進めたことで、幼稚園・小学校双方の教育方法や幼児・児童の姿等の共通理解が促進され、それを基に援助や指導へ生かすことができた。

△就学前施設保育者と小学校教員とが互いの保育・教育活動を理解するためには時間がかかる。そのため、意図的・計画的に互いの活動を見学し合ったり、対話したりする機会と場所を設定していく必要がある。

（2）「5歳児から小学校低学年までを連続した時期として捉えた指導計画」の作成及び実践について

◎指導計画を作成し、教員一人ひとりが幼児・児童の学びの連続性を踏まえた実践をすることで、主体的に活動する幼児・児童が育ってきた。

△「文字・言葉」「数量・図形」「自然」の3つを研究の視点として設定したが、教科学習以外の幼小のつながりも整理し、実践していく必要がある。

（3）小学校施設内に設置した『ななはけラボ』の活用と活用計画の実践と検証について

◎「ななはけラボ」を活用し、教員が就学前教育と小学校教育との接続を意識した援助や指導を行うことで、子どもたち自身も幼小のつながりを感じるようになった。

△今後も「ななはけラボ」を継続して活用し、多くの活用事例を集め、次年度以降へとつなげていく。

（4）幼児・児童の双方にとって効果的だと考えられる交流活動の通年実施について

◎5歳児は小学校への期待や憧れの気持ちが高まり、期待や安心感をもって就学することにつながった。また、小学校第1・2学年児童は、自分たちがこれまでしてきた経験が小学校での学習や次の学年の学習につながっていることを意識し、学びを深めることにつながった。

△近隣の就学前施設との交流活動を更に広げ、連携を深めることができるようにする。

○御指導いただいた方々

○研究保育・研究授業でご指導いただいた先生方（名前五十音順）

前校長・敬愛大学 教育学部こども教育学科 教授 小林 輝明 先生
武蔵野大学 教育学部 幼児教育学科 教授 箕輪 潤子 先生

○「荒川区就学前教育と小学校教育との一層の円滑な接続を図る教育課程の研究・開発委員会」でご指導いただいた先生方（名前五十音順・年度順）

玉川大学 教育学部 教育学科 教授 坂野 慎二 先生（令和元年度～令和5年度）
国立教育政策研究所 総括研究官 山森 光陽 先生（令和元年度～令和5年度）
東京未来大学 こども心理学部こども心理学科 特任教授 長谷川 かほる 先生（令和3年度～5年度）
武蔵野大学 教育学部 幼児教育学科 教授 箕輪 潤子 先生（令和4年度・5年度）
学習院大学 文学部 教育学科 教授 秋田 喜代美 先生（令和2年度・3年度）
元文部科学省 初等中等教育局教育課程課 教科調査官 渋谷 一典 先生（令和2年度）
白梅学園大学 子ども学研究学科 名誉教授 無 藤 隆 先生（令和元年度）

「荒川区就学前教育と小学校教育との一層の円滑な接続を図る教育課程の研究・開発委員会」の委員の皆様
東京都教育庁指導部義務教育指導課長、統括指導主事及び指導主事の皆様
荒川区教育委員会事務局指導室長、統括指導主事及び指導主事の皆様

○研究に携わった教職員

校 園 長	高 田 大	副 校 長	杉 山 和 美	副 園 長	種 田 保 子		
幼 稚 園	◎森山 寛子	○大石 佳苗					
小 学 校	○近藤 実乃里	伊藤 あかり	○江崎 生功子	大塚 凜太郎	○堀内 浩平	小林 美友	
	○川村 健太郎	吉野 真由	○石田 潤	杉山 凌太	◎山田 篤	緑川 楓	
	○澤井 匡子	○竹島 紫	吉田 夢華	中村 菜恵	○仲田 恵	木村 美華	
	井坂 登	多勢 千夏	須藤 香代子	村尾 俊和	亀山 恵美	橘 史代	
	内山 美絵	森 保良	伊藤 友香理	北村 臣子	徳山 まりの		
主 事	小林 弘延	黒田 典子	石井 弘美	村上 孝枝			
育 休	中村 有紀子	郷間 遥					

◎研究主任 ○研究推進委員

これまで研究に携わった教職員（令和2～4年度）

幼稚園 木村 洋子、高澤 有子、菅原 悠子、鈴木 加奈子、田中 貴子、福井 あゆみ
小学校 三浦 亜紀、鈴木 美和、池崎 純子、大洞 真由子、東谷 千恵子、小玉 千春、長谷川 源秀、
杉野 早紀、松田 恵理子、小柴 祥子、加藤 正子、片山 直子、小林 幸子、石渡 孝、池田 梨那、
飯塚 ちよ子、鳴澤 明、久米 治代